

आयूस: あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館 / 京都府宇治市槇島町千足80

*** アルファマの少年 ***

京都文教短期大学図書館長

幼児教育学科・教授 (造形表現) 津田直樹

1971年7月、私のこの旅は新潟からナホトカへ向かうソビエト船から始まった。船の中では何枚かの写生を没収され、山では寒空の星を眺めて野宿もした。イタリアの空手教室では日本人の若い指導者に招かれて私の得意技を演武させられる羽目にもなった。スイスでは私の旅の目的の一つでもある個展契約も無事に済ませた。画廊の主人は私の絵を見て「このサイズ40点くらいの制作時間はどれくらいだ」と尋ね、「1年」と答え、「君の個展は来年の今日オープンだ」と言い、「オルテンの画廊に続いてチューリッヒでも開催する」とつけ加えた。

8月20日、私は今スペインからポルトガルへ向かっている。リスボンのアルファマへ。そこは私のこの旅の中で最も期待する写生地の一つである。

午前10時20分マドリッド発リスボン行き急行ラピッドに乗り込んだ。この列車は一等車と二等車があり食堂車付で当時名をはせた欧州横断急行T.E.Eと並び称されていた豪華列車である。陳腐に聞こえるが40年も前のことである。車窓は

想像通りの風景であって、白い太陽は果てしく広がる大地に強烈な明暗のコントラストを描き、丘の城は熱さに揺れ、赤くなった太陽は天地を紅に染めて砂塵は天に昇る。遠くの民家や馬の群れはゆったりと後方へ、小さな駅舎は目の前を飛んで行く。ポルトガルに近づくにつれて車内の音楽はスペイン民謡からポルトガルのファドに変わっていて、紅の大地もテージョ河の流れとともにオリブやコルクの緑の大地と変わって羊や牛の群れが牧場に帰る頃、大自然の懐をひた走った急行ラピッドと車窓の風景を描き続けた私は午後7時30分リスボンに到着した。



赤い屋根

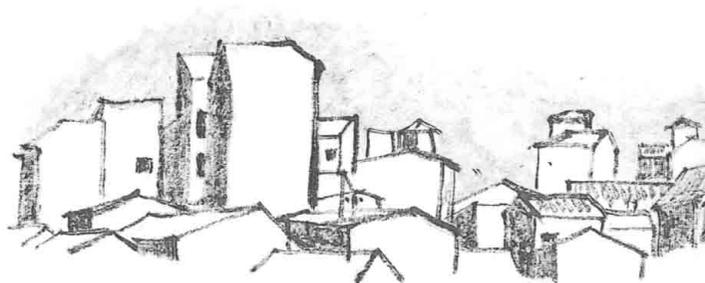
ポルトガル・リスボン・アルファマ地区。私はアルファマの細くて曲がりくねった坂道を上っている。想像していたとおりの風景だ。路の両側には古びた白いアパートがひしめき合い、頭上には青や黄色のランタンが垂れ下がっていて、その上の窓では女性が身を乗り出して色とりどりの洗濯物を干している。彼女は向かいの窓の女性たちと大声で喋り、笑い、アパートの入り口では老婆が七輪で大きなピーマンを焼いている。老人は新聞を広げ、赤子が泣いて、少年は輪回して疾走していく。この活気に満ちた小さな喧噪は何故か懐かしく心地よい。ここには働き盛りの男性は居ない。男たちは皆遠洋へ出かける漁師であり何ヶ月も帰って来ず、帰っても又出かけるのである。ここは、子どもを育てる妻と家を守る老人の力強くキラキラ生きる街、アルファマ。30分ほど歩いて坂を上り切ると小さな広場に出た。眼下は限りなく青い海。振り返ると赤い屋根のアパートはひと塊となっていて、その向こうにはリスボンの港と大小の船がしっかりと見える。男たちの無事を祈るのであろう教会もあった。

私は広場に座り込み赤と白の家並みを見下ろして早速写生を始めた。だが1時間もたたないうちに困ったことになった。少年たちがやってくるの

はいつものことだが、一人、又一人と老人がやって来て、物売りも通行人も集まって、いつの間にか私の周りは人だかりになっている。自転車の上に立って覗く者、後ろの人々は理由も分からず集まっていて、果てには傍の老人が私の絵を説明し始めた。動きのとれない車のクラクションが鳴り出して、私はもう写生しているどころではなくなり一度立ち去ろうと試みたのだが誰一人として動く気配は無く、本当に私は写生を止めることにした。私が坂道を下りるとき二人の少年が声をかけて来た。あしたも来るかと。私は勿論来るつもりであったが今の騒ぎである。躊躇して返事をしなかった。坂道の一つ目の曲がり角まで歩くと坂上から声がして、二人の少年がジャポネ、グッパライと手を振っている。こちらもリスボア、グッパライと返して又歩き続けた。最後の角を曲がって坂を下りきると丘の上から小さくなった二人の少年がまだ手を振っている。私は手を振って声はもう届かないが二人の少年に返事をした。勿論、午後も来るよ、明日も。

掲載の赤い屋根はアルファマから眺めたりスボンの海です。(歳：祇園白川、サントロペー)

(つだ なおき)



at fides

☆☆☆ 私の体を通り過ぎていった数々の図書館たち ☆☆☆

総合社会学部・教授（文化人類学） 遠藤 央

文化人類学を専門としているため、考えてみると、フィールドワークの途中で様々な国の図書館、公文書館を訪問した。

一番長い時間を過ごしたのは、独立する前のパラオ博物館の研究図書室だろう。ここには、植民地支配が始まったスペイン以来、ドイツ、日本と信託統治をしたアメリカのパラオやミクロネシアに関する資料、本、雑誌、博士論文、現地の新聞、選挙公報、ビラ、チラシ、パンフレット、ビデオなどが収集されており、だれにも邪魔されずにそれらを読むことができた。日本統治時代に建てられた気象台の建物の片隅にある小さな部屋だが、堅いパイプ椅子に座っていても、集中できる場所であった。何の制限もないのいいところである。

マレーシアの研究をしているときに、必要があってブリティッシュ・ライブラリーにいったことがある。入館には所属機関の長の紹介状が必要とあったが、パスポートのマレーシア調査ビザをみせて、こういう資料をみたいのだという、カウンターにいた図書館員が「いいよ」といって、入館証を発行してくれた。上司に聞くとかはいいさもなく、その場で自分の責任で即決というのが気持ちよかった。ただ、研究者が多数詰めかけるため、1日に請求できる件数に上限があり、「はずれ」の資料をいくつか請求してしまうと、その日はおわりになるのが、世界的に有名な図書館のつらいところである。

英米の図書館、公文書館のいいところは、図書館員がほんとうのプロであるところだろう。ほしい資料をみつける手助けを真剣にやってくれる。今の日本で問題になっている公文書の破棄など

は、本当に意識のちがいを痛感させられる出来事なのだ。

オアフ島のハワイ大学ハミルトン・ライブラリーは、パスポートを見せて登録すれば、自由に使用できる。パシフィック・コレクションがあるのでよく利用したが、パラオの知り合いが学生の時に書いたタームペーパー（学期末のレポート）まで所蔵されており、会ったときに「読んだよ」といったら、驚いていた。

公文書館には資料が山のようにあるので、そのなかから必要なものを見つけるには、かなりの慣れがいる。キーワードやその組み合わせをかえて、何度も検索する必要があるのだ。

昨年は数年ぶりにサイパンの北マリアナカレッジにある信託統治アーカイブスにいったが、いたんだマイクロフィルムの中から日本統治時代の公文書を探り出すのは、おもしろい作業だった。なかでも、戦前にサイパンに移住していた日本人が現地のチャモロ人の家のコンサートに招待され、どうせたいしたことはないだろうとたかをくくって行ったところ、ベートーベンのシンフォニーを聴かされて驚いた、という文章をみつけたのは、愉快であった。つまり、ドイツ統治時代に現地のエリートは、青島に行ってドイツ流の教育をうけていたのに、馬鹿にしていたということなのである。

グアムにフィールドワーク実習に行ったときも、学生がみたいという資料をすぐにだしてくれたり、図書館、公文書館、そして館員のみなさんには本当に助けられたことに感謝して、この文章を終わりたい。

（えんどう ひさし）

🌸🌸🌸 心に残るコンサート二つ 🌸🌸🌸

幼児教育学科・教授（声楽・音楽教育・音楽療法） 伏見 強

受験時代のこと。楽譜や専門書などを求めて心齋橋の「YAMAHA」によく行った。その帰り路、戎橋の向こうを御堂筋方面に少し入ったところにあった音楽喫茶「ウィーン」に時々立ち寄った。この店には、客のリクエストしたモーツァルトやベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーなどのシンフォニーやコンチェルトが、高品質のオーディオから絶え間なく流れていて、聴き入る大人たちの姿が哲学する群像の様にも観えた。

その頃、中之島のフェスティバルホールでフェルッチョ・タリアヴィーニのテノールリサイタルを聴いた。1958年に始まる大阪国際フェスティバルが、フェスティバルホールのこけら落としとして企画されたというから、この演奏会は第10回目くらいのプログラムの一つではなかっただろうか。

タリアヴィーニは鮮やかなブルーのタキシードで登場し、ドニゼッティのオペラ「愛の妙薬」より「人知れぬ涙」やカンツォーネ「忘れな草」など、彼の十八番(おはこ)をたっぷりと歌った。彼はピロードのような光沢のある美声を武器に、力強い表現とピアノッシモを効果的に用いるなどの技巧を駆使し、自信に満ちた艶やかで華やかなステージを展開した。受験を控えた片田舎の高校生が本場イタリアのベル・カントを生で耳にし、自らの進路選択に確信を得たと錯覚した瞬間でもあった。

三大テノールと称されるドミンゴやカレラス、パバロッチェの少し前に、金星のように煌めいていたテノールの雄姿は、40数年の歳月を経ても今なお見事に蘇ってくる。

幼児教育と縁をいただいて漸く10年が経つ。当然のこととはいえ、長年関わってきた声楽発声が、時に保育表現・幼児音楽としての発声との間でギャップが生じ、違和感を覚えることもある。そうした折、この新たな課題に答を出してくれた

と感じさせる演奏会に出会った。

2012年1月28日、パルティール京都で行われた宇治市社会福祉協議会主催の「新春福祉の集い」で、荒川知子さんとフルート奏者の父、ピアノ教師である母の三人による、ファミリーアンサンブルを聴いた。宇治市内の福祉関係者300余人を前に、ダウン症の彼女が素晴らしいソプラニーノを披露したのである。

ビブラートのない透明感のあるリコーダーの響きは清く澄みわたり、素朴な歌声は一点の曇りもなく、清々しい美しさを秘めていた。この日も力みのない素直な声で、ジャンルを超えた名曲「ソレアード」を歌い、聴衆に「幸せです」と語りかけた。かつて、神童モーツァルトを前にした大人たちが仰天したような、そんな驚きにも似た空気が会場を覆ったと思った。

兄も新日本フィルハーモニー交響楽団の首席フルート奏者。文字通りの音楽一家で、音楽をする人にとってはこれ以上の恵まれた環境はないが、障害を乗り越えて、これほどの演奏を可能にするには、相応の努力のあったことが容易に推察される。

万雷の拍手が鳴り止むのを待って、控室に戻る家族の後を追った。不覚にも、あどけないその仕草や表情から、せいぜい10代半ばと思い込んで話しかけてしまったが、28歳になったという。

演奏に先駆けて、父・健秀さんから「表現する喜び、それは生きること～娘の成長と音楽表現～」と題して短い講演があった。音楽遊びに始まり、学級集団の中での感動体験が演奏に結びついていったこと、本物の音や演奏の視聴が背景にあること、演奏は娘にとって最高の成長の場となったこと、などが淡々と語られた。

結びの言葉「表現することは、生きること」「生きることは、表現すること」が重く響く。

(ふしみ つよし)

🌸🌸🌸🌸 私のすすめる3冊 🌸🌸🌸🌸

ライフデザイン学科・助教（運動生理学・生気象学） 久米 雅

1. 『好きになる生理学ーからだについての身近な疑問』 田中越郎 著／講談社

近年、健康志向によりテレビや新聞等の各メディアで「生理学」という言葉を聞くことが多くなったと思います。生理学とは生体の機能やメカニズムを追求・探究するもので、なぜ心臓が寝ている間も動き続けているのか、なぜ人は酸素を取り入れなければ生きていけないのか等、日常生活や運動場面においての生体现象を論理的に説明するものです。今回推薦する「好きになる生理学」は身体についての身近な疑問を分かりやすい文章とイラストで説明しています。この本の中にきっと興味のあることが書かれていると思います。

2. 『質問力ー話し上手はここがちがう』 齋藤 孝 著／筑摩書房

コミュニケーション力が要求される現代において、私は情報を得る能力が非常に重要だと考えています。自分が知りたい情報はインターネットや本等、比較的簡単に得ることができます。しかし、人と話して情報を得るといって身構えてしまう人も多いのではないのでしょうか。人から聞いた生きた情報はメディアを通じたものよりも実践的な場合もあります。この本には人から情報を得る術と話をする側に立った時、その情報を自分の知識に変換するための術が書かれています。是非、就職活動や大学生活に役立てて下さい。

3. 『仕事の5力』 白濁敏郎 著／中経出版

この本は仕事を円滑に行うために必要な1. 聞く力、2. 考える力、3. 話す力、4. 書く力、5. 時間力の5つの力を紹介しています。私はこの本を読んで、確かに仕事をする際に、このような能力は必要だと思いましたが、この本の内容を友達との日常生活、クラブ・サークル、就職活動等に応用することが十分に可能だと思いました。この本はビジネス書ですが、だれが読んでも非常に読みやすく、実践するためのシートも付属しているので、是非試してみてください。

(くめ まさし)

♡♡♡♡ 本は好きですか ♡♡♡♡

幼児教育学科2回生 中島あや

「本は好きですか？」の問いに対して、高校生のころの私は、きっと「嫌いではないけれど好きでもないかな」と答えたと思います。そして「でも読むことは好き」とも答えたと思います。現在の私は「読むことも好き」だし、「本も好き」と答えることができます。

ある本に出会い、私の本に対する価値観は変わりました。そして、図書館でのアルバイトを通して、その思いはより深くなったように思います。

私の知る本の魅力は、想像できること、知らない世界に連れて行ってくれること、そして紙媒体の本だからこそ、その本自身に歴史があるということです。

一つめの想像できることは、登場人物のことだけを指しているわけではなく、そこに描かれている風景も匂いも空気もすべてのことがそうだと思うています。

それは、作者が想像し、言葉で表された人物を、私たち読者がその通りに想像できるはずがなく、また、想像しなければいけないわけでもないように、風景も、匂いも、空気もそうだと思うんです。

例えば、ある物語に肉じゃがが食卓に並ぶ風景が描かれていたならば、その肉じゃがの味も、盛り付け方も、匂いも、或いは食卓の光景も、読んだ人の数だけあると思います。桜吹雪、公園、小学校、海、教室、病院、雪だるま。空の青さや風の温度、星空やオーロラ。どこで見たのか、何で見たのかさえ分からない、もしかしたら見たことなんてなくて想像だけかもしれない風景を、絵や映像がないからこそ、期待を裏切られることなく、楽しむことができると思っています。文字から想像すること、それが本の魅力で、本を読むというのがもっと自由だと信じている理由です。百

人いたら、百通りの見方が、発見があつていいんじゃないかと。

そして、私の価値観は角田光代著の『この本が、世界に存在することに』という本により変わりました。この本には九つの短編が収録されています。その中の一つの物語に登場する、古本屋店主なのに接客もせず本を読み耽るおばあさんのある言葉から、本が知らない世界に連れて行ってくれるということを知りました。また、この本に載っている物語すべてから、本自身に歴史があるということを感じたのです。そのおばあさんの言葉は、「開くだけで何処へでも連れてってくれるものなんか本しかないだろう」というもので、その町から出たことのないおばあさんにとって、本というものは外の世界を教えてくれるものだったのかもしれない。

たとえば外国のもの、或いは昔のもの。外国のものならその外国の地へ、昔のものはその時代へ、ページをめくるだけで連れて行ってくれるのです。また、職業のことも知らない世界だと思えます。だから、物語を読むだけでその登場人物の、職業の実際を知ることができると思っています。そこには架空の、もしくは過去の、一人の人生の一部が切り取られているからです。私はこの角田さんの本に出会って知らない世界に連れて行ってもらい、本が本として存在するからこそ本自身の歴史を持っているということを知りました。

それまでは意識したこともなかったことなので、物語を読んで初めてその価値観に遭遇した時は思わず嬉しくて叫びそうになったことを覚えています。実際「ああ、そっかあ」くらいは口にしていたかもしれません。でもその価値観を知り共感したところで、現実には物語のようなことも

なく、実感としては薄れていきました。そんな中、図書館でアルバイトをさせていただくことになり、本を本棚に返していく途中でふと、そういえばこの本は、この間も借りられていたなと思うことが、様々な本で何度もありました。この本たちはいろいろな人に読まれてここに返ってきて、そしてまた読まれていくのだろうと思い、その時に、本は本自身の歴史を持っているということに唐突に思い出しました。それ以来、本の返却作業は私の大好きな仕事になっています。この本は

どんな人に読まれてきたんだろうと思わず想像して、何だか楽しい気持ちになるからです。だから、私は図書館が好きです。本が好きです。

すこしでも本のことを好きになれそうだなって思う人が増えたら嬉しいと思います。

(なかじま あや)

『この本が、世界に存在することに』

角田光代 著／メディアファクトリー

***** 食育指導と母校の図書館 *****

食物栄養専攻卒業生（2009年度） 玉 木 美 帆

私は去年の春から、恩師を通じて知り合った管理栄養士の先生が、大阪の私立幼稚園で月に一度食育指導なさるということで、お手伝いをさせて頂いております。対象は5歳児と4歳児です。発達に応じた指導内容を先生と相談した後、食育指導で使用する紙芝居などの媒体作りを任せられます。

私はこの媒体を、園児にいかに分かりやすく、そして楽しんでもらえるかを軸に考えながら何日もかけて作成します。食育指導では園児たちの「視覚」から入る情報が非常に重要なので、この媒体づくりは食育における肝となるのです。その媒体作りにおいて、足繁く通わせていただいているのが母校文教短大の図書館です。

自分でイラストから考えるのは気の遠くなるような作業ですが、図書館にあるイラスト集や食育の本などを参考にして、毎回大変ながらも楽しく媒体づくりをさせていただいています。そうして出来上がった媒体の紙芝居は、先日の食育指導でも大好評でした。一つ一つの試行錯誤や工夫は園児たちの反応となって返って来るのです。

驚いたり、喜んだり、はしゃいだり、園児たちのそんな姿を見ることが一番の励みになります。

この食育指導が、少しでも彼らの健やかさを育むお手伝いになればと願いながら、私自身、日々食育指導に携わっています。これからも、図書館を利用させて頂きたいと思っています。

(たまき みほ)



❖❖❖❖ “本”を考える ❖❖❖❖

臨床心理学部2回生 石川達也

帰省をして気がついた。大きなキャリーバッグ、中身の大半は本じゃないかと。着替えは本に圧迫されて入らず置いてきた。本に勉強道具、パソコンにバリカン。これで全てだ。ほとんどの本は図書館からの借り物である。夏休みも10冊借りた。しかし、しっかり読めたのはせいぜい5、6冊である。残りはほぼ読まずに返却してしまった。私は本を読むのが遅いのだ。夏に懲りず今回も10冊借りた。その上、友達から借りた本もある。こんなに読めるか。雪かきで忙しいのに。

このように、私は本が好きである。読書では月並な趣味となるが、私の場合は表紙・背表紙など、本の外観を眺める方が好きなのだ。中身を読むことではないのであまり良い趣味とは言えないかもしれないが。特に古書はなんとも言えない。色褪せた表紙に静けさを感じ、独特の匂いに歴史を思う。前の所有者の書き込みを見つけたら、もうその本は読まずにいられない。隅々に目を通し、どうしてここに線を引き、何故こんな書き込みをしたのか、この所有者はこの本で何を考え、何を学びとったのか。この視点で読むのが面白いのである。

言うまでもなく、誰かに読み聞かせる場合を除けば、読書とは一人で行うものである。本と自分、一対一で読書する中、内容に感動し、新たな知識に喜ぶこともある。このような感銘を受けた本は、人に薦めたくなるものだ。しかし、困ったことに毎度、我が無学が功を奏するため、大抵の本にはそれなりに感動してしまう。だから、ついつい沢山の本を色々な人に薦めてしまうのだ。貸

した本が戻って来ないのは、その本が余りに気に入ったか、もしくはまだ読んでいないかのどちらかであろう。気を急かすような、押し付けがましい推薦は迷惑かもしれない。ならば、いっそ贈ってしまえばよい。自制するうちに、貸与癖が贈与癖に変わってしまったことも悩みの種である。

この一年、図書館の書架整備などを手伝わせていただいた。作業の度に気になる本が見つかる。題名に惹き付けられるものもあれば、デザインに惹かれることもある。なんと小さな本だろうと驚くこともあれば、こんなでかい本どうやって持ち運べるの、と思うものもある。また、図書館の本には独特の古さも感じる。良いことではないが、図書への書き込みや傍線が引いてあったりすると、少し嬉しくなる。きっと、自分より先に学んだ人を意識することで、負けじと励めるからだろう。以上が私の大まかな本の楽しみ方である。

そういえば、最近、電子書籍が気になりだした。あの機械一つでかなり沢山の本を読めるらしい。しかも、“しおり”とかいう便利な機能があるそう。読書の際に何度も逆走する私である。使いこなす自信は微塵もないが、少し体験してみたい。しかし、私にとって本とは物体であるからこそ本なのだ。朽ちない本では読み込んだ実感が湧かず、形を持たねば贈れない。しかも、誰かの書き込みは見るべくもなく、デザインや重さに惹かれることもないだろう。そう思うと、浮気心を抑えて、周りよりも頑なであってもいいじゃないかと、わずかながらも思う。

(いしかわ たつや)